

## いよいよ出番です



高島直一  
(1976～1981)

私は1976～1981の間支部長を勤めさせて頂きました。その間、大阪市工研の永井進氏、細野耀代さんには、SPE日本支部の事務局として、又、広報、印刷関係はプラスチック・エージ社には初代支部長以来ずっとお世話になり、又私が支部長になってからは、日本合成樹脂技術協会事務局の沼田氏・熊田氏に東京事務局として、月例会のお世話をお願いし、又、工学院大学の山口章三郎教授をお願いして、資料室の機能を果たして頂きました。又、月例会、RETEC等の企画運営について、松崎清一郎委員長以下各委員の手弁当のお骨折りを頂きました。改めて皆様方に厚く御礼申し上げますと共に、SPE日本支部とはそのような善意の奉仕の上に成立しているということを再認識する次第です。いわば、その基をなすものは会員の皆さんのプラスチックへの熱い情熱であると思うのであります。30週年を期に又新しく時代に沿ったSPEの発展を期待するもの切であります。

この原稿を書くにあたって編集担当の方の御厚意で送って頂いたSPE Japan Section News Letterの'77～'81があります、又1970の正月に副支部長として書かせて頂いた拙文と共に目を通して居りますと感慨新たなものがあります。

'70. 2. 8 版には

…今後の加工技術の進展は、大量生産、高速化、省力性と生産性の飛躍的向上要求と、一方、加工時に物理的構造の複合化、架橋などの化学反応を加味し、かつ異種材料の組合わせ構造を作り出すという、むづかしい技術の開発が要求されている。したがって、各種広範の分野の専門家のシステム化によらなければ、このような要請にこたえることは不可能である。……

SPEがそのような異種専門家の接触協力の場になって、新しい加工技術への夢を実現する推進力となることができるような集りになれば誠に楽しいことである。(45. 2. 8)…と書いています。この文章の始めの所には……70年代の開幕ということで、……たしかに過去の10年と今後の10年とでは、我々プラスチックの世界においても、大きな変化が起りそうである。色々な歪みが表面化してきて、何とかしなければどうにもならない問題か氷山の頭のようにあらわれてきた。好むと好まざるとにかかわらず、今後の資源や消費動向を眺めるとき、材料革命は必然的であり、その解決の方向は合成材料、人造材料の開発・発展に以外にないとなれば、プラスチックに寄せられる期待は大きく、果すべき責任も重大であるといわねばならない。……

とも書いて居ります。

これから3. 5年後には第一次オイルショックが起り、その前年にニクソンショックが起りました。今にして思えば、今日の円高・石油安・貿易摩擦の問題も、その頃からの一連のシナリオの延長であります。日本人の叡智によって、第一次、第二次のオイルショックを乗り越えて、苦しみの中を一步一步、産業構造を変貌させながら、欧米と対等の立場迄発展して来ました。その結果が今日の国際的四面楚歌のありさまです。50年前の大戦前夜の頃の国際情勢のようだという人も居ります。私達若人は銃をとって祖国防衛の為に身を挺しました。今はどうでしょう。今は1970年代以来の大きな時代の変化の大詰めであって居

ります。余りに平和な飽食に溺れることなく、今こそ心をひきしめて新しい国際時代に生き残る為に身を挺するときであると思うのです。

新聞には「産業の空洞化」という言葉がひとくさりして「国際化」という言葉におきかえられ、この頃は「構造失業」という言葉も出始めました。「国労」の大会も混乱のまま過ぎ、騒然たる世相を感じます。

心を引きしめて、耐えるべきに耐え、経済競争に生き残れる努力を第一次産業も第二次産業も真剣に為すべき秋であります。財テクなどという虚業は一時の身すぎ世すぎであって、本質的な解決策ではありません。積極的に国際化を進めて、生き抜く力と産業構造・産業組織を一日も早く確立することこそ日本の最大の課題であると思います。

国際化というのは、世界的な産業構造を変え、地域分業、国際的相互依存の形態を作っていくことである。資源国、労働集約産業国、先進工業国、ハイテク技術産業国と多くの役割を持ちつつ、相互依存で共存共栄をはかってゆくのが、理想の姿であるが、一方ナショナリズムの根も強いし、それぞれの国々の政治力学の問題もあり、甚だ複雑である。しかし、方向を見失ってはいけなし、努力しなければならないのであります。

日本が相互依存の国際化の中で優位にハイテク技術産業国家の立場を維持して生き抜く為にはあくなき科学、技術の向上発展以外に道はない。SPEメンバーの役割も自づからそこにあると思います。

肩苦しい議論は抜きにしても、この頃のプラスチックの技術、高分子材料科学は実に興味深い発展をしている。70年代の幕開けの拙文を冒頭に紹介させて頂いたが、その頃こんな方向にと思っていたことが、どんどん実現して来ている。樹脂の熔融粘弾性のデータをインプットして、コンピューターで金型内の樹脂の流れをシミュレーションすることが当り前のことになって来た。リアクティブ・プロセスは射出成形のRIMだけでなく、押出機を化学反応のリアクターとして使用する技術も進んで来た。汎用樹脂の変性の一般化、エンジニアリング・プラスチックの汎用化、スーパーエンプラの出現、ポリマーアロイによる変幻極まりない改質、などなど、実に面白くて面白くて仕様の無い状況になって来た。私は、プラスチック時代第2期と呼んでいます。百花繚乱にも似た高分子材料の花野に居て、心楽しい日々であります。まして国際化時代です。これからが定番です。

SPE日本支部の皆さんの一層の御活躍を期待して止みません。